



Title	日本人における老年的超越の構成要素の検討:老年的超越と超高齢者の生の意味および幸福感の比較
Author(s)	中島, 千宏
Citation	生老病死の行動科学. 2022, 26, p. 11-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87655
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本人における老年的超越の構成要素の検討

— 老年的超越と超高齢者の生の意味および幸福感の比較 —

Re-examination of Gerotranscendence among Japanese People:

A Comparison of Components on Gerotranscendence, the Meaning of Life and Well-being of the Oldest old

(大阪大学人間科学部人間科学科) 中島 千宏¹

(Osaka University, Undergraduate School of Human Sciences) Chihiro Nakajima

Abstract

The purpose of this paper was to examine the components of gerotranscendence in older Japanese people. The gerotranscendence theory is one of the theories of psychological development in old age. It has attracted attention because it presents a new way of successful aging and also may be applicable to very old people. However, gerotranscendence includes a complex and wide range of factors, and its ambiguities have been discussed. This paper compared the components of gerotranscendence in Europe, the components of the Japanese gerotranscendence scale, and the content of very old Japanese people's narratives about the meaning of life and well-being. As a result, it was suggested that there were some components that were specific to Japanese people or that were not captured by the existing scale. In the future, it is expected to establish the concept of gerotranscendence of Japanese people considering these components.

Key words: gerotranscendence theory, successful aging, psychological adaptation

はじめに

令和 3 年版高齢者白書によると、2020 年時点で日本の総人口に占める 65 歳以上人口の割合は 28.8% であり、2065 年には約 2.6 人に 1 人が 65 歳以上、約 3.9 人に 1 人が 75 歳以上になると推測されている。また、平均寿命は 2019 年時点で男性が 81.4 歳、女性が 87.5 歳となり、延伸し続けている (内閣府, 2021)。高齢化が進む中で、誰にでも必ず訪れる高齢期をいかに幸福に生きるか、つまりいかにサクセスフルエイジングを実現するかは重要な課題といえる。

サクセスフルエイジングは、高齢者の健康や幸福に関わる重要な概念である。医学、社会学、心理学

の観点からサクセスフルエイジングのモデルが議論されてきた。医学や社会学におけるサクセスフルエイジングの議論では、身体機能や社会参加活動を維持していることが重視される (Rowe & Kahn, 1997)。しかし、特に超高齢期には身体的側面の機能低下は避けられない一方で、そういった諸機能が低下する超高齢期においても、主観的健康感や幸福感などの心理的側面の指標は維持されることが示されている (権藤他, 2005)。このことから、医学・社会学のみではなく、心理学の観点からサクセスフルエイジングを捉えることが重要であると考えられる。

老年的超越理論 (Gerotranscendence Theory) は、サクセスフルエイジングに関する心理学的理論の一つで、高齢期に高まるとされる「物質的・合理的な価値観から宇宙的・超越的な価値観への変化」を意味する (Tomstam, 1989, 2005)。日本では、高齢者を対象とした老年的超越の傾向を測定するための尺度の開発が行われているが、一部の低位尺度の信頼性・妥当性の低さが指摘されている (増井他, 2010,

¹ Correspondence concerning this article should be sent to; Chihiro Nakajima, Undergraduate School of Human Sciences, Osaka University, Osaka University, 565-0871, u703103f@ecs.osaka-u.ac.jp

2013)。その原因の一つとして、老年的超越の内容が複雑で幅広い要素を含むが、回答に要する負荷を減らすために少数の項目構成にしていることが挙げられる(増井他, 2013)。よって、既存の尺度では捉えきれていない要素が存在する可能性がある。今後、日本人における老年的超越概念の再検討を行い、尺度を精緻化することが求められる。

本論文では、日本人における老年的超越の構成要素を検討することを目的とする。まず老年的超越の理論や尺度開発に関する研究を概観する。次に Tornstam (2005) による老年的超越のオリジナル概念を軸に、日本で開発された老年的超越質問紙の構成要素および日本人超高齢者を対象とした質的研究から得られた語りの内容との比較検討を行い、共通点や相違点について論じる。超高齢者に対する質的研究は、生の実存的側面や幸福感を捉えたもので、老年的超越と類似する語りがみられたため比較検討に用いることとした。

サクセスフルエイジング

サクセスフルエイジングに関して、医学、社会学、心理学的観点から様々な議論が行われている。Rowe & Kahn (1997) は、医学的側面からサクセスフルエイジングを捉えたモデルを提唱した。彼らは、「病気や障害が軽度であること」「認知・身体機能が高く維持されていること」「積極的に社会参加していること」の3つをサクセスフルエイジングの構成要素であるとしている。

また、社会的側面に焦点を当てたサクセスフルエイジングの代表的な理論として、高齢期においても中年期の活動や態度をできる限り維持し続けることが幸福な高齢期であるとする活動理論 (Lemon, Bengtson, & Peterson, 1972) と、中年期までの活動的な生活から離れる過程を受け入れそれを望むことが幸福な高齢期であるとする離脱理論 (Cumming & Henry, 1961) がある。活動理論と離脱理論のどちらがサクセスフルエイジングの理論として妥当であるかという議論が行われたが、結論は出していない。

心理学的サクセスフルエイジングは、加齢と共に生じる変化に対する心理的適応に焦点を当てる。エリクソンらの生涯発達理論はその一つである。Erikson & Erikson (1997 村瀬・近藤訳 2001) は、誕生から死に至るまでの心理・社会的発達の過程を8つの段階に分け、各段階で経験する対立や葛藤が発達の成熟あるいは心理・社会的危機をもたらすと述べている。

Rowe & Kahn (1997) のサクセスフルエイジングのモデルが身体機能の維持や積極的な社会参加活動を重視している点について、実態にそぐわないのではないかという指摘がある。Strawbridge, Margaret, & Cohen (2002) は、自身がサクセスフルエイジングを達成しているかどうかという自己評価および Rowe & Kahn (1997) の基準の2つを用いて、65歳から99歳の高齢者のサクセスフルエイジングを評価した。その結果、Rowe & Kahn (1997) の基準を満たしていないにもかかわらず、自己評価では自身の老いをサクセスフルであると回答した参加者が47.3%にのぼった。

また、Jopp et al. (2015) は、サクセスフルエイジングを実現するためには身体的・社会的側面だけではなく、心理的側面が重要であることを指摘している。アメリカとドイツの15歳から96歳の306人を対象に、サクセスフルエイジングに影響すると考える要因について尋ねたところ、幸福感や満足感という心理的要因に言及した人の割合は49.3%であった (Jopp et al., 2015)。この結果は、身体的・精神的健康の維持を含む医学的要因や、社会的つながり・社会参加活動などの社会的要因に言及した人の割合がそれぞれ81.7%、65.7%だったことと比較すると低いものの、一般市民がサクセスフルエイジングを実現するために心理的要因を重視していることを示している。

日本においても、身体機能が低下しているにもかかわらず心理状態を維持している高齢者の存在が確認されている(権藤他, 2005; 小川他, 2008)。権藤他 (2005) は、特に超高齢者における客観的機能側面と主観的心理側面の乖離の拡大を指摘している。東京在住の百寿者を対象とし、視聴覚機能、認知機能、身体機能の状態を評価した調査では、3つの機能すべてに問題がない参加者の割合は1.6%で、視聴覚機能に加えて認知機能または身体機能の少なくとも一方が障害されている参加者が79.9%を占めた (Gondo et al., 2006)。このように超高齢期には身体的側面の機能低下が顕著となるが、主観的健康感や幸福感といった心理的側面の指標は必ずしも低下しない。

上述のように、サクセスフルエイジングに関する議論は様々な領域で行われている。サクセスフルエイジングを考える際、医学的・社会的側面だけではなく、心理学的側面にも目を向けることが重要であると言える。

老年的超越理論とは

老年的超越理論は、心理学的サクセスフルエイジングの理論の一つである。Tornstam (1989) は離脱理論を基盤に老年的超越理論を構築した。Tornstam (1997, 2005) は老年的超越理論について、宇宙的領域、自己の領域、社会と自己の関係の領域の3つの領域からその発達的变化の特徴を述べている。宇宙的領域における変化として、時空間の認識が変化することや、生死の境界が曖昧になること、宇宙や人類全体とのつながりを感じるようになることなどが挙げられる。自己の領域では、自己に対するこだわりが減少し、他者中心的な考え方への移行が生じる。また、自分の人生を振り返って肯定することで自己統合の感覚を得るという変化が現れる。社会と自己の関係の領域では、表面的な人間関係よりも深く深い人間関係を築くことや、1人で過ごすことを好むようになるなどの変化が生じる。社会的地位や名誉、金銭などに対して価値を見いださなくなり、社会規範にとらわれない独自の価値観を持つようになると考えられている (Tornstam, 1997, 2005)。

老年的超越理論は、離脱理論や生涯発達理論の第8段階における発達と類似する点もあるが、従来の高齢期に関する理論とは異なる、新たな心理社会的理論であるとされる (Schroots, 1996)。Erikson & Erikson (1997 村瀬・近藤訳 2001) は生涯発達理論の観点から、老年的超越とは、超高齢期に直面する危機に向き合い、時空や限界を超え、死の恐怖を乗り越える大きな跳躍であると述べ、超高齢期における新たな発達の可能性を指摘している。

複数の先行研究において、老年的超越が高齢期の心理的側面に与えるポジティブな影響が示唆されている。例えば、老年的超越と人生満足感の間に有意な正の関連があることが示されている (Hoshino, Zarit, & Nakayama, 2012; Tornstam, 2003, 2005)。また、身体機能が低下しているにもかかわらず心理的 well-being が高かった群は、心理的 well-being が低かった群よりも老年的超越の一部の下位因子の得点が有意に高いことが示された (増井他, 2010)。前期・後期高齢者を対象とした縦断研究では、老年的超越の精神的健康への影響が、経済状況などの社会的要因の影響よりも相対的に大きかったことから、社会的ネットワークが縮小しがちな後期高齢者、超高齢者の精神的健康の維持・促進に老年的超越が寄与する可能性があると考えられている (増井他, 2019)。

また、超高齢期における肯定的な発達的变化を示

す老年的超越の考え方は、現在健康な人々に対し、老いに対する新たな見方をもたらす可能性が指摘されている (Hoshino et al., 2012)。Tornstam (1996, 2005) は、高齢者施設などで働くスタッフに対し老年的超越理論を紹介し、理論を知ることが高齢者に対する理解や接し方に影響するかについて検証を行った。その結果、半年後の効果検証で、参加者自身の老いに対する考えや高齢者に対する理解および接し方が、一部の参加者において肯定的に変化した (Tornstam, 1996, 2005)。このことから、老年的超越理論の理解は、高齢者に関わる周囲の人々に対しても肯定的な影響を与えると考えられる。

Gondo, Nakagawa, & Masui (2013) は、2つの観点から老年的超越理論の超高齢期への適用可能性を指摘している。1つ目は、老年的超越が認知資源を必要としない適応方略である点である。高齢期の心理的適応方略に関する理論として、選択最適化補償理論 (Selection, Optimization, and Compensation Theory, 以下, SOC 理論とする) (Baltes, 1997) や社会情動的選択性理論 (Socioemotional Selectivity Theory, 以下, SST とする) (Carstensen, 2006) がある。

SOC 理論は、目標を達成することが困難になったとき、目標の選択、目標達成のために必要な資源の最適化、外部の援助などによる補償を行い、目標を達成するという適応方略を指す (Baltes, 1997)。SST は、残された時間が限られていると認識することによって、ポジティブな感情をもたらす情報に注目するなど、感情的な満足感を得るように動機づけられるという理論である。 (Carstensen, 2006)。これらの理論に基づく方略は認知資源を必要とする。しかし、超高齢期において認知機能の低下は免れないため、これらの方略を利用し続けることは難しい。一方で老年的超越理論は、適応過程で認知資源を必要とする方略とは異なり、加齢に伴う価値観や考え方の自然な変化によって喪失に適応するとする理論であるため、超高齢期にも適用可能であると考えられる (Gondo et al., 2013)。

2つ目は、超越的な価値観の変化が超高齢期に直面する問題を乗り越える助けとなる点である。超高齢期には、心身の機能低下や、死が身近になることによって、他者からのケアが必要となり、自分の存在価値を疑問に感じてしまう存在論的問題に直面する可能性がある。身体・認知機能の低下が避けられない超高齢者にとって、環境を変えたり、自身の技能を高めたりするなどの戦略的・論理的な考え方をを用いてこの問題を解決することは難しい。そこで、あるがままの状態を受け入れたり、自己中心的な価

値観から離脱したりするなどの超越的な考え方をを用いることで他者の助けを必要とする自分の状況を受容・肯定し、存在論的問題をより容易に乗り越えられると考えられる (Gondo et al., 2013)。

老年的超越理論の有用性が指摘される一方で、その発達のメカニズムや促進要因は明らかでないことが課題として挙げられる。Tornstam (2005) は、年齢、職業、収入、婚姻状況といった社会属性因子、疾病や死別のような人生の危機といえる偶発的影響因子が老年的超越に影響を与える可能性を示唆している。一方、年齢や人生の危機の経験による影響は、老年的超越の3つの領域や性別によって異なることが示され、コホート効果の検証や、縦断研究の必要性が指摘されている (Tornstam, 2005)。Jewell (2014) は、老年的超越理論に対する批判的な論文をレビューし、老年的超越という概念が曖昧であることや、年齢との関連性についての疑問、老年的超越の発達に対するパーソナリティの影響に十分な注意が払われていないことなどを指摘している。

また、老年的超越が文化に依存する可能性も指摘されている (Jewell, 2014)。Tornstam (1989) は理論の構築にあたり、禅やユングの集合的無意識という東西の宗教的・哲学的な考え方を取り入れており、文化の違いによって老年的超越の内容や発達過程が異なる可能性が考えられる。日本人高齢者を対象としたインタビュー調査では、Tornstam が提唱した老年的超越の概念とは異なる特徴が見出された (増井他, 2010; 富澤, 2009)。よって、老年的超越理論の適用にあたっては、文化差を考慮することが必要である。

以上のように、老年的超越理論はその有用性が指摘されている一方で、発達過程や関連要因については議論の余地があり、発展途上の理論であると言える。今後、老年的超越の概念の検討や実証研究を重ね、理論を精緻化していくことが求められる。

老年的超越の尺度開発と課題

Tornstam は、2つの老年的超越の尺度を作成した (Tornstam, 2005)。1つ目の尺度は、「現在、私は50歳の時と比べて、生と死の間の境界が曖昧になったと感じている」などの10個の質問項目からなり、各質問に対し「はい」か「いいえ」の2件法で答えるというものである。この尺度は、宇宙的超越と自己超越という2因子構造であることが示された (Tornstam, 2005)。しかし、この尺度は回答者が回顧的に評定を行わなければならないという点が課

題として指摘されている (Hoshino et al., 2012; Tornstam, 2005)。

2つ目の尺度は、Tornstam (1997) の質的研究から見出された、老年的超越の3つの領域、すなわち宇宙的領域、自己の領域、社会と自己の関係の領域を踏まえて作成された。この尺度では、「私は宇宙全体とつながっていると感じる」などの10個の質問項目に対し、自身の経験と感覚に基づいてどの程度自分に当てはまるかを4件法で尋ねるもので、宇宙的次元 (Cosmic dimension)、一貫性の次元 (Coherence dimension)、孤高の次元 (Solitude dimension) の3因子構造であることが示されている (Tornstam, 2005)。

Cozort (2008) は、Tornstam の老年的超越尺度に基づき、米国南部の高齢者を対象として Reveised Gerotranscendence Scale (Cozort, 2008) を作成した。その結果、米国南部の高齢者も超越的な変化を経験しており、この尺度によって測定可能であることが示された。しかし、下位尺度の信頼性・妥当性は低く、質問項目の修正や除去を行い、改善する必要性が示された (Cozort, 2008)。

日本においても、老年的超越尺度の開発が行われている。Hoshino et al. (2012) は、Tornstam の2つ目の尺度 (Tornstam, 2005) について、原典であるスウェーデン語から直接日本語に翻訳したものを作成する必要があるとして日本語版翻訳尺度を作成し、因子構造の確認を行った。その結果、日本人高齢者においても、オリジナル版と同じく、宇宙的次元、一貫性の次元、孤高の次元の3因子構造となることが示された。

一方で、老年的超越理論の適用にあたって文化差を考慮する必要があるとされていたことから、日本人高齢者における老年的超越を検討した研究もある。増井他 (2010) は、Tornstam (1997) のインタビューガイドに基づいて日本人高齢者を対象にインタビュー調査を行い、日本版老年的超越質問紙 (Japanese Gerotranscendence Scale, JGS: 増井他, 2010) を開発した。JGS は、『「ありがたさ」・「おかげ」の認識』、『「内向性」・「二元論からの脱却」』、『「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」』、『「社会的自己からの解放」』、『「基本的で生得的な肯定感」』、『「利他性」』、『「無為自然」』の8因子で構成された (増井他, 2010)。

JGS は、サンプルの代表性の偏りや下位尺度の内的・一貫性の低さが問題であったため、尺度の妥当性・信頼性を高めることを目的として日本版老年的超越質問紙改訂版 (Japanese Gerotranscendence Scale Revised, JGS-R: 増井他, 2013) が作成された。JGS-R

も JGS と同様に 8 因子構造で、高齢・女性で下位因子の得点が高いという年齢・性別との関連が確認され、さらに一定の妥当性と信頼性が示された（増井他, 2013）。増井他（2010）による JGS は、老年学に関する講演会の参加者が約 7 割を占める集団を対象として作成されたのに対し、JGS-R の対象者は関西および関東の都市部と非都市部という 4 つの異なる特性を持つ地域在住高齢者から構成された（増井他, 2013）。この対象者の違いにもかかわらず JGS と同様の因子構造、年齢・性別との関連を確認できたことから、JGS-R は日本の高齢者を対象とした老年の超越研究での利用可能性が高いと考えられる（増井他, 2013）。

しかし、JGS-R においても、内的一貫性が低い因子や、天井効果がみられる項目、因子負荷量が低い項目が存在していた（増井他, 2013）。原因として、老年の超越は広範で複雑な要素を含むが、参加者の負担を考慮して少数の項目構成にしていること、高齢者は長い人生の中で一人一人が多様な経験をしてきているため個人差が大きく、項目の意味の取り方が回答者間で変わってしまったことが考えられる（増井他, 2013）。増井他（2013）は、下位尺度の内容的妥当性や統計的特性を考慮し、さらに改良していく必要があると述べている。

尺度の改良にあたり、既存の尺度では捉えきれない要素の探索や、構成要素として既に含まれている要素の内容についても詳細な検討を行い、尺度の精度を高めることが求められる。例えば、JGS-R において統計的特性を検討する必要があるとされた下位因子の一つに、『「ありがとうさ」・「おかげ」の認識』がある（増井他, 2013）。この因子は、「人のありがとうさを実感している」「周りの人の支えがあるからこそ私は生きていける」「良いことがあると他の人のおかげだと思う」の 3 項目から構成されるが、最初の 2 項目で天井効果がみられたことが報告されている（増井他, 2013）。このことから、多くの人がありがたいという感情を持っていることが推測されるため、項目の表現を再考し、感度を高める必要があると言える。項目の中では「人」「周りの人の支え」「他の人」など、ありがとうさを抱く対象が人に限定されているが、人間以外の事物に対してもありがとうさを感じている高齢者がいる可能性もある。日常の中で抱く感謝の気持ちの程度を測定する尺度である The Gratitude Questionnaire-6（McCullough, Emmons, & Tsang, 2002）には、「私は年を取るにつれて、自分の人生の一部である人々や出来事、状況により感謝できるようになってきた」

「何かや誰かに感謝の気持ちを抱くまでに長い時間がかかる」という項目が含まれる。これらの項目では、人だけではなく物に対する感謝の気持ちも表現されている。ありがとうさを抱く対象を人に限定せず、より幅広く捉えることで項目の感度を向上させられる可能性がある。

また、増井他（2010）による JGS において内的一貫性が低かった「二元論からの脱却」という下位因子は、JGS-R においても改善されなかった（増井他, 2013）。時間の弁別的な態度からは脱却できても道徳的・倫理的態度には個人差があることや、超高齢者において発達する因子である可能性が指摘されている（増井他, 2013）。

このように、国内外で老年の超越の傾向を測定する尺度が開発されているが、老年の超越概念の複雑さ、曖昧さに起因する統計的問題が指摘されている。今後、老年の超越の構成要素や、質問項目の内容を再検討し、尺度の精度を向上させることが求められる。

老年の超越の構成要素の比較検討

中川他（2011）および安元・権藤・中川・増井（2017）は、超高齢者を対象としたインタビュー調査を通して、身体機能の低下などに伴う困難な状況に対し、心理的適応を遂げている様子を見いだした。中川他（2011）と安元他（2017）のインタビューから得られた超高齢者の語りには、老年の超越に含まれる要素と重なる内容がみられた。このことから、中川他（2011）および安元他（2017）は、超高齢者の生の実存的意味や幸福感について、老年の超越理論の従来とは異なる発達観を取り入れることで理解が深まる可能性を指摘している。

中川他（2011）は、85 歳以上の超高齢者を対象に、日常生活における生の体験を見直し、生命、生活、人生に対して超高齢者が抱いている意味や価値を記述することを目的としてインタビュー調査を行った。その結果、「つながっていること」「変わっていくことに気づくこと」「変わらないことを見いだすこと」「自分だけにできることをみつけること」という 4 つのテーマが抽出された。中川他（2011）は、変化に対する矛盾した態度や「つながり」の認識は、老年の超越の構成要素の一部と解釈できると述べている。

また、安元他（2017）は、百寿者にとつての幸福感の概念を理解することを目的としてインタビュー調査を行った。普段の生活や、幸せを感じる時や出

来事、記憶について具体的に尋ね、オープンコーディングを行った結果、「前向きな気持ちで生きること」「制限のなかで生きること」「他者とのよい関係を築くこと」「人生の充足感を感じること」「あるがままの状態を受け入れること」という5つのカテゴリーが抽出された。「あるがままの状態を受け入れること」は、JGS-Rの構成要素の一つで、「考えない」「気にならない」「無理しない」といったあるがままの状態を受け入れるようになるという内容の「無為自然」（増井他，2013）と類似している（安元他，2017）。

JGSおよびJGS-Rは、Tornstam（1997）のインタビューガイドやTornstam（2005）による尺度に基づいて質問項目を作成しているが、尺度作成の過程で、Tornstam（2005）のオリジナル概念に対応する項目の脱落や、オリジナル概念とは異なる要素の存在が示された（増井他，2010，2013）。増井他（2010）は、オリジナル概念との相違を検討し、日本人における老年的超越の概念を確立する必要性を述べている。中川他（2011）および安元他（2017）による研究は、日本人超高齢者の生の意味や幸福感を、日常生活に焦点を当てて明らかにしたものであり、超高齢者の日常的な価値観や考え方を反映していると言える。Gondo et al.（2013）が超高齢期への老年的超越の適用可能性を指摘していることから、中川他（2011）と安元他（2017）の研究を参照し既存の老年的超越の構成要素と比較検討することは、日本人における老年的超越概念の精緻化のために意義があると考えられる。

本論文では、Tornstam（2005）による老年的超越の構成要素を軸として、増井他（2013）によるJGS-Rの構成要素、中川他（2011）と安元他（2017）による質的研究の結果を用いて老年的超越の構成要素の比較検討を行った。表1は比較検討の結果をまとめたものである。JGS-R（増井他，2013）や生の意味（中川他，2011）および幸福感（安元他，2017）の構成要素のうち、Tornstam（2005）と共通する意味内容を含む構成要素の名称を横一列に並ぶよう記述した。対応するものがない場合は「（対応なし）」と記した。以下では表1に沿って、各構成要素の共通点や相違点についてTornstam（1997，2005）による老年的超越の3領域ごとに述べる。

宇宙的領域

Tornstam（2005）が示した宇宙的領域の構成要素の多くは、JGS-Rの構成要素にも含まれるものであった。Tornstam（2005）は、宇宙的領域の構成要素

として、「時間と幼少期」「過去の世代とのつながり」「生と死」「生命の神秘」「超越的な幸福の源泉」を挙げている。

Tornstam（2005）における「時間と幼少期」という構成要素は、時空間の認識が変化し、子ども時代に戻ったような感覚や、過去と現在の境界が曖昧となる感覚を意味する。これは、JGS-Rにおける「私の気持ちは昔と今を行ったり来たりしている」という項目が含まれる「二元論からの脱却」（増井他，2013）と共通していた。

また、「過去の世代とのつながり」（Tornstam，2005）は、先祖や次世代との繋がりを感じるという内容が含まれる「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」および「基本的で生得的な肯定感」（増井他，2013）と共通すると考えられた。これらの構成要素は、中川他（2011）による、自分と過去や未来とのつながりを指す「つながっていること」というテーマとは共通点がみられたが、安元他（2017）にはみられなかった。

Tornstam（2005）による、「死の恐怖がなくなり、生死の認識が変化する」という「生と死」という構成要素は、生死の認識に関する内容が含まれるという点で、JGS-Rとの共通点がみられた。「もう死んでもいいという気持ちともう少し生きていたいという気持ちが同居している」という項目を含む「二元論からの脱却」や、「死後の世界がある」「生かされていると感じることがある」という項目を含む「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」（増井他，2013）は、Tornstam（2005）における「生と死」と共通していた。このような要素は、中川他（2011）の「つながっていること」や「変わっていくことに気づくこと」というテーマ内の、死の恐怖が減少し、死を生の延長であるとして受容するという語りや、安元他（2017）の「十分に生きた感覚」というサブカテゴリーにおける、十分に生きた感覚を持ち、死に対する恐怖を感じないという語りとも共通すると考えられた。

さらに、人生における、科学では説明できない神秘的な側面を受け入れるという「生命の神秘」（Tornstam，2005）は、JGS-Rにおいて神仏の存在や死後の世界を信じるという項目から構成される「宗教的もしくはスピリチュアルな態度」（増井他，2013）と共通していた。これは、死者や神仏など、可視化されない存在への親和性に関する語りを含む「つながっていること」（中川他，2011）とも共通すると考えられた。

表 1
老年的超越と超高齢者の生の意味および幸福感の構成要素の比較

	Tomstam の構成要素 (Tomstam, 2005)	日本版老年的超越質問紙改訂版 (JGS-R) の構成要素 (増井他, 2013)	超高齢者の生の意味の構成要素 (中川他, 2011)	百寿者の幸福感の構成要素 (安元他, 2017)
宇宙的領域	時間と幼少期	二元論からの脱却	つながっていること	(対応なし)
	過去の世代とのつながり	宗教的もしくはスピリチュアルな態度/ 基本的・生得的な肯定感	つながっていること	(対応なし)
	生と死	二元論からの脱却/ 宗教的もしくはスピリチュアルな態度	つながっていること/ 変わっていくことに気づくこと	十分に生きた感覚
	生命の神秘	宗教的もしくはスピリチュアルな態度 (対応なし)	つながっていること つながっていること/ 自分だけにできることをみつけること	(対応なし) 日常生活に関心事を見つけたす
自己の領域	超越的な幸福の源泉	(対応なし)	自分だけにできることをみつけること	(対応なし)
	自己対峙	(対応なし)	(対応なし)	他者との調和
	自己中心性の減少	「ありがたさ」・「おかいげ」の認識/ 社会的自己からの脱却/利他性	(対応なし)	他者との調和
	身体的超越の発達	無為自然	変わっていくことに気づくこと/ 変わらないことを見いだすこと	限界の認識/考えすぎさない
社会と自己の 関係の領域	自己に対するこだわりの減少	利他性	自分だけにできることをみつけること	(対応なし)
	自我統合	基本的・生得的な肯定感	変わらないことを見いだすこと	生きることへの満足
	人間関係の重要性と意味の変化	内向性	自分だけにできることをみつけること	他者との調和
	社会的役割の認識	社会的自己からの脱却	(対応なし)	(対応なし)
感謝 あるがまま	無垢さの解放	社会的自己からの脱却/ 基本的で生得的な肯定感 (対応なし)	自分だけにできることをみつけること	日常生活に関心事を見つけたす
	物質的なものに対する態度	(対応なし)	(対応なし)	限界の認識
	経験に基づく知恵	社会的自己からの脱却/ 二元論からの脱却	(対応なし)	他者との調和
	(対応なし)	「ありがたさ」・「おかいげ」の認識	(対応なし)	世話をされる有難さ
	(対応なし)	無為自然	変わっていくことに気づくこと/ 変わらないことを見いだすこと	考えすぎさない/自然に任せる/ 平穏な気持ち

「超越的な幸福の源泉」(Tornstam, 2005)は、JGS-Rにはみられないが、中川他(2011)や安元他(2017)のインタビューでは語られた要素であった。「超越的な幸福の源泉」は、日常の中で経験する身の回りのささやかな物事や自然から幸せを感じられるようになるという変化を意味する(Tornstam, 2005)。これは、中川他(2011)の「つながっていること」や「自分だけにできることをみつけること」に含まれる、家族とのつながりに対する幸福感や、歌うことや描くことを小さな楽しみや生きがいとしているという語りとの共通点がみられた。また、安元他(2017)は、制限の中で楽しみや関心事を見いだす態度を、「日常生活に関心事を見つけ出す」というカテゴリーとして抽出した。例として、聴覚機能が低下しているが、月に数冊の本を買うことを楽しみにしているなどの語りがみられた。これらの要素は、身の回りの小さな幸せを感じられるようになるという「超越的な幸福の源泉」(Tornstam, 2005)と共通すると考えられた。また、Tornstam(1997, 2005)は「超越的な幸福の源泉」の重要な要素として、日常の中で自然に触れる経験を指摘している。中川他(2011)の「自分だけにできることをみつけること」においても、「これからまだまだ山の世話になるし、自然を相手にしてがんばっていききたいなと思ってる」という自然との関わりに関する語りがみられた。よって、日本の超高齢者も、日常生活の中で「超越的な幸福の源泉」(Tornstam, 2005)を感じていることが示唆された。

Tornstam(2005)の宇宙的領域における要素は、JGS-Rにおいて善悪、生死、現在と過去の区別が曖昧になるという内容の質問項目から構成される「二元論からの脱却」(増井他 2013)との共通点が多くみられた。しかし、増井他(2010)は、「二元論からの脱却」について、二元論的に概念や現象を対立させることの困難さが強調されている点はオリジナル概念と異なると述べている。例えば、生死に関する内容が含まれる点で、「二元論からの脱却」はTornstam(2005)による「生と死」との共通点もあるが、Tornstam(2005)は死に対する恐怖の減少など、死を重点的に扱って議論している。それに対しJGS-Rでは、生死について「もう死んでもいいという気持ちともう少し生きていたいという気持ちが同居している」という質問項目で表現されており、生と死の両側面が捉えられている(増井他, 2010, 2013)。この相違点は、日本人における老年的超越の特徴の一

つである可能性が考えられた。

また、宇宙的領域では「超越的な幸福の源泉」(Tornstam, 2005)のみがJGS-Rではみられない要素であった。しかし、中川他(2011)や安元他(2017)において日常の中で小さな幸福を感じているという語りがみられたことから、「超越的な幸福の源泉」が日本人の老年的超越の構成要素として存在する可能性があり、今後の検討の必要性が示唆された。

自己の領域

Tornstam(2005)は自己の領域について、「自己対峙」「自己中心性の減少」「身体的超越の発達」「自己に対するこだわりの減少」「自我統合」という構成要素を示している。

「自己対峙」は、それまで気づいていなかった自分の新たな一面を見直したり、発見したりするという内容である(Tornstam, 2005)。これは、JGS-R、中川他(2011)、安元他(2017)ではみられない要素であった。

「自己中心性の減少」は、自分自身の存在の重要性を感じなくなるという変化を指す(Tornstam, 2005)。これは、JGS-Rの『「ありがたさ」・「おかげ」の認識』や、「社会的自己からの脱却」、「利他性」における、自己の重要性の認識が低下し、周囲の人々を重視するようになるという内容と共通していた(増井他, 2013)。また、これらは安元他(2017)の「他者との調和」というカテゴリーにおける、周囲の人々に逆らわないようにするという語りとも共通すると考えられた。中川他(2011)では、類似する内容はみられなかった。

自分の身体へのこだわりが減少するという「身体的超越の発達」(Tornstam, 2005)は、「現在起こっている身体の変化やこれから起こり得る変化はそのまま受け入れるものである」という「変わっていくことに気づくこと」(中川他, 2011)や、「身体・認知機能の低下を自覚し、限界を認めて葛藤することなく平穏に過ごす」という「制限の中で生きること」(安元他, 2017)というカテゴリーと共通していた。一方JGS-Rでは、こだわりの減少の対象を身体に限定した項目はみられなかった(増井他, 2013)。しかしJGS-Rにおける「無為自然」という構成要素は、Tornstam(2005)の「身体的超越の発達」と部分的に一致すると考えられた。「無為自然」は、「よいことも悪いことも、あまり考えない」「できないことがあってもよくよししない」「細かいことが気に

ならなくなった」という項目から構成され(増井他, 2013), 自分や自分の周囲の状況に対するこだわりの減少を意味すると言える。これは, 身体を含めた, より包括的な自己に対するこだわりの減少と解釈でき, 「身体的超越の発達」(Tornstam, 2005) の要素を内包すると考えられた。

Tornstam (2005) における, 利己主義から利他主義への移行を指す「自己に対するこだわりの減少」は, JGS-R における「利他性」と共通していた。「利他性」は, 自己中心性から他者中心性への移行を意味する(増井他, 2013)。中川他 (2011) では, 他者の役に立ちたいという語りを含む「自分だけにできることをみつけること」というテーマが抽出されており, これらとの共通点が認められた。安元他 (2017) では, 利他性に関連する内容はみられなかった。

「自我統合」は, 自分の過去を振り返り, 肯定的な意味づけを行うことができるという内容を指す(Tornstam, 2005)。これは, JGS-R における, 自分の人生を肯定的に評価するという内容の「基本的で生得的な肯定感」と共通していた。中川他 (2010) による「変わらないことを見いだすこと」というテーマにも, 自分が長く生きてきたことを肯定的に捉える語りが含まれた。また, 安元他 (2017) においても, 過去を振り返って自分の人生に満足するという語りが得られ, 「生きることへの満足」というサブカテゴリーとして抽出された。これらは Tornstam (2005) の「自我統合」と共通すると考えられた。

自己の領域では, 「自己対峙」(Tornstam, 2005) のみが JGS-R や日本人超高齢者の語りにはみられない要素であった。

社会と自己の関係の領域

Tornstam (2005) によると, 社会と自己の関係の領域は「人間関係の重要性と意味の変化」「社会的役割の認識」「無垢さの解放」「物質的なものに対する態度」「経験に基づく知恵」から構成される。

「人間関係の重要性と意味の変化」は, 狭く深い人間関係を好むようになるという変化を意味する(Tornstam, 2005)。JGS-R における「内向性」は, 「ひとりでいるのも悪くない」「ひとりで過ごす時間は大切だ」などの項目から成り, 孤独の必要性の認識という点で共通すると考えられた。中川他 (2011) では, 「自分だけにできることをみつけること」というテーマ内に, ひとり

暮らしを気ままに楽しむという語りが含まれた。また, 安元他 (2017) においても, 限られた周囲の人々との良好な関係性を築くという「他者との調和」を重視する超高齢者の存在が示され, Tornstam (2005) の「人間関係の重要性と意味の変化」との共通点が認められた。

「社会的役割の認識」は, 自己と役割を分けて認識するようになり, 社会的役割の重要性が低下するという変化を意味する(Tornstam, 2005)。JGS-R における「社会的自己からの脱却」は, 社会や周囲に対して自己主張をしなくなるという変化を意味し(増井他, 2013), Tornstam (2005) における「社会的役割についての認識の変化」と共通すると考えられた。中川他 (2011) や安元他 (2017) においては, 社会的役割に関する語りはみられず, 超高齢期において, 社会的役割が生きる意味や幸福感に大きな影響を与えないことが示唆された。

人の目が気にならなくなり, 無邪気さや天真爛漫さが現れるという「無垢さの解放」(Tornstam, 2005) は, JGS-R の「社会的自己からの脱却」や「基本的で生得的な肯定感」に含まれる, 社会的規範から逃れるという要素や, あるがままの自己を肯定するという要素と共通していた。中川他 (2011) の「自分だけにできることを見つけないこと」というテーマには, ピアノを弾くことや歌うことを楽しみとしているという語りがみられた。また, 安元他 (2017) の「日常生活に関心事を見つけたす」にも, 月に数冊の本を買うことや, 食事を楽しみにしているという語りが含まれた。このような日常の中の遊びや些細な物事を楽しみとする様子は, 「無垢さの解放」(Tornstam, 2005) や JGS-R の「社会的自己からの脱却」, 「基本的で生得的な肯定感」と共通すると考えられた。

物質的な富や豊かさに対する執着が低下するという「物質的なものに対する態度」(Tornstam, 2005) は, JGS-R と中川他 (2011) ではみられない要素であった。安元他 (2017) では, 「楽しみにしていることはありますか」という問いに対し, 美味しいものを食べたいと思うことはあるが, もうそんなに欲はなく十分だという語りがみられた。これは「限界の認識」というカテゴリーに含まれており, Tornstam (2005) の「物質的なものに対する態度」と共通すると考えられた。老年的超越の定義が「物質的・合理的な世界観から宇宙的・超越的な世界観への変化」であることから, 物質的豊かさを重視しなくなるという傾向は老

老年的超越の中心的な要素だと考えられる。安元他（2017）の日本人超高齢者の語りに「物質的なものに対する態度」（Tornstam, 2005）と共通する内容がみられたことから、日本人における老年的超越の概念にも含まれる可能性が考えられた。

「経験に基づく知恵」は、表面的に善悪を区別することに抵抗感を持ち、他者に対して判断や助言を与えることを控えるようになるという変化を指す（Tornstam, 2005）。これは、JGS-Rにおける「人がやっていることについて口を出したくなる」という項目が含まれる「社会的自己からの脱却」や、「善悪の区別をすることはむずかしい」という項目が含まれる「二元論からの脱却」（増井他, 2013）との共通点がみられた。また、安元他（2017）の「他者との調和」というサブカテゴリー内における、できる限り友達に逆らわないようにしているという語りとも共通すると考えられた。中川他（2011）では類似する要素はみられなかった。

社会と自己の関係の領域では、「物質的なものに対する態度」（Tornstam, 2005）のみがJGS-Rではみられない要素であった。しかし、一部の日本人超高齢者の語りには物質的なものへの執着が低下している様子がみられたことから、「物質的なものに対する態度」が日本人の老年的超越の構成要素として存在する可能性があり、今後の検討の必要性が示唆された。

Tornstam の 3 領域以外の要素

Tornstam（2005）によるオリジナル概念にはなく、JGS-R（増井他, 2013）や超高齢者の語り（中川他, 2011；安元他, 2017）にはみられた要素もあった。周囲に感謝する態度と、あるがままの状態を受け入れるという2つの要素は、JGS-R、超高齢者の生の意味（中川他, 2011）および幸福感（安元他, 2017）のみでみられた。

周囲に感謝する態度は、JGS-Rと安元他（2017）でみられた要素であった。JGS-Rの『「ありがたさ」・「おかげ」の認識』という構成要素には、自分の生が他者の存在によって成り立っているのだと感じ、周囲の人々に感謝する態度が含まれる（増井他, 2013）。これは、Tornstam（2005）の「自己中心性の減少」が指す、自ら世界の中心から退き、自分自身の存在を重視しなくなるという内容と共通する点もみられた。しかし、「自己中心性の減少」は、自己中心性が低下するという状態のみを捉えており、周囲に感謝する態度は含

まれない。安元他（2017）のインタビューにおいても、「子どもや孫がよく面倒を見てくれる」という語りから「世話をされる有難さ」という感謝を意味するカテゴリーが抽出された。また、感謝の気持ちを抱く対象としては、JGS-Rと安元他（2017）では、いずれも人のみを対象としており、McCullough et al.（2002）の感謝尺度に含まれるような人以外の物に対する感謝の気持ちを示すという内容はみられなかった。

あるがままの状態を受け入れるという要素は、JGS-R、中川他（2011）、安元他（2017）で共通してみられた。「無為自然」は、「考えない」「気にならない」「無理しない」などの、あるがままの状態を受け入れる傾向を指す（増井他, 2013）。中川他（2011）は、「生きることは自分の力の及ばない自然な変化の連続であるとして受け入れる」、「自然のまにまに生きればよいと思っている」という語りから「変わっていくことに気づくこと」や「変わらないことを見いだすこと」というテーマを抽出した。また、安元他（2017）においても、「考えすぎない」「自然に任せる」「平穏な気持ち」というサブカテゴリーから成る「あるがままの状態を受け入れる」というカテゴリーが抽出された。これらはJGS-Rにおける「無為自然」の内容と共通していた。このことから、日本の超高齢者は、自分と自分の周囲の環境まで広く対象として、「無為自然」の感覚を抱いていると考えられた。これらのオリジナル概念には含まれていない要素は、欧州とは異なる日本人における老年的超越の要素であることが示唆された。

Tornstam（2005）によるオリジナル概念、増井他（2013）によるJGS-Rの構成要素、中川他（2011）および安元他（2017）の超高齢者の語りの比較を通して、欧州と日本における老年的超越の共通点や相違点が示された。「超越的な幸福の源泉」、「自己対峙」、「物質的なものに対する態度」（Tornstam, 2005）の3つの要素はJGS-Rには含まれなかった。また、周囲に感謝する態度やあるがままを受け入れる態度は日本人高齢者のみでみられた要素であった。これらの要素に着目し、今後日本人高齢者における老年的超越概念についてさらに検討していく必要がある。

おわりに

老年的超越の傾向を測定する尺度は、Tornstamが提唱した構成要素を軸として、翻訳版や修正版、

独自の尺度が国内外で開発されている。日本では現在、高齢者に対するインタビュー調査を行って作成した JGS および JGS-R を用い、老年的超越と幸福感との関連（増井他，2010）や、精神的健康への影響（増井他，2019）が検討され、老年的超越が高齢期の幸福感に寄与する可能性が示唆されている。しかし、いずれの尺度においても下位因子の十分な信頼性や妥当性は認められておらず、さらなる改良が求められる。老年的超越は本質として、相反する事象が矛盾することなく同時に存在するという現象を含んでいる。その複雑さや曖昧さは、概念を適切に測定する尺度の作成を困難にしていると考えられる。

本論文では、欧州での研究に基づく老年的超越のオリジナル概念、日本での研究に基づく老年的超越の尺度の構成要素や超高齢者の語りの比較検討を行い、それぞれの共通点や相違点が示された。オリジナル概念における「超越的な幸福の源泉」と「物質的なものに対する態度」（Tornstam, 2005）は、日本の尺度には含まれない要素であったが、日本人超高齢者の語りには含まれた。このことから、これらの要素も日本人の老年的超越の一要素として存在する可能性があると考えられ、今後の検討の必要性が示唆された。また、周囲に感謝する態度とあるがままの状態を受け入れる態度は、オリジナル概念には含まれず、日本の尺度や超高齢者の語りには含まれた構成要素であり、欧州とは異なる日本の特徴的な要素として検討する必要があると考えられた。

今後、本論文で見いだされた、既存の日本版尺度には含まれない構成要素や日本人に特徴的な構成要素を踏まえ、日本における老年的超越の特徴を反映した尺度の開発や関連要因の検討などを行い、日本人の老年的超越概念を確立することが期待される。

引用文献

- Baltes, P. B. (1997). On the incomplete architecture of human ontogeny selection, optimization, and compensation as foundation of developmental theory. *American Psychologist*, 52(4), 366-380.
- Carstensen, L. L. (2006). The Influence of a Sense of Time on Human Development. *Science*, 312(5782), 1913-1915.
<https://doi.org/10.1126/science.1127487>
- Cozort, R. W. (2008). *Revising the Gerotranscendence Scale for use with older adults in the southern United States and establishing properties of the Reised Gerotranscendence Scale* (Unpublished doctor's thesis). The University of North Carolina, Greensboro.
http://libres.uncg.edu/ir/uncg/f/Cozort_uncg_0154D_10037.pdf
- Cumming, E., & Henry, W. E. (1961). *Growing old, the process of disengagement*. New York: Basic Books.
- Erikson, E. H., & Erikson, J. M. (1997). *The life cycle completed*. W.W. Norton. (エリクソン, E. H., & エリクソン, J. M. 村瀬 孝雄・近藤 邦夫 (訳) (2001). ライフサイクル, その完結【増補版】みすず書房)
<https://doi.org/10.1037/0022-3514.82.4.642>
- 権藤 恭之・古名 丈人・小林 江里香・岩佐 一・稲垣 宏樹・増井 幸恵・鈴木 隆雄 (2005). 超高齢期における身体的機能の低下と心理的適応 板橋区超高齢者訪問悉皆調査の結果から 老年社会科学, 27 (3), 327-338.
- Gondo, Y., Hirose, N., Arai, Y., Inagaki, H., Masui, Y., Yamamura, K., ... Kitagawa, K. (2006). Functional status of centenarians in Tokyo, Japan: Developing better phenotypes of exceptional longevity. *Journal of Gerontology: Medical Sciences*, 61A(3), 305-310.
<https://doi.org/10.1093/gerona/61.3.305>
- Gondo, Y., Nakagawa, T., & Masui, Y. (2013). A new concept of aging in the oldest old development of gerotranscendence and its influence on the psychological well-being. *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, 33(1), 109-132.
<https://doi.org/10.1891/0198-8794.33.109>
- Hoshino, K., Zarit, S. & Nakayama, M. (2012). Development of the gerotranscendence scale type 2: Japanese version. *International Journal of Aging and Human Development*, 75(3), 217-237. <https://doi.org/10.2190/AG.75.3.b>
- Jewell, A. J. (2014). Tornstam's notion of gerotranscendence: Re-examining and questioning the theory. *Journal of Aging Studies*, 30, 112-120.
<https://doi.org/10.1016/j.jaging.2014.04.003>
- Jopp, D. S., Wozniak, D., Damarin, A. K., De Feo, M., Jung, S., Jeswani, S., & Williamson, J. (2015). How could lay perspectives on successful aging complement scientific theory? Findings from a U.S. and a German life-span sample. *The Gerontologist*, 55(1), 91-106.

- <https://doi.org/10.1093/geront/gnu059>
- Lemon, B. W., Bengtson, V. L., & Peterson, J. A. (1972). An exploration of the activity theory of aging: Activity types and life satisfaction among in-movers to a retirement community. *Journal of Gerontology*, 27(4), 511-523. <https://doi.org/10.1093/geronj/27.4.511>
- 増井 幸恵・榎藤 恭之・河合 千恵子・呉田 陽一・高山 緑・中川 威・藺 幸田 洋美 (2010). 心理的well-Beingが高い虚弱高齢者における老年的超越の特徴——新しく開発した日本版老年的超越質問紙を用いて—— 老年社会科学, 32 (1), 33-47.
- 増井 幸恵・榎藤 恭之・中川 威・小川 まどか・石岡 良子・稲垣 宏樹・石崎 達郎 (2019). 地域高齢者の精神的健康の縦断変化に及ぼす老年的超越の影響の検討——疾患罹患・死別イベントに対する緩衝効果に注目して—— 老年社会科学, 41 (3), 247-258.
- 増井 幸恵・中川 威・榎藤 恭之・小川 まどか・石岡 良子・立平 起子・高橋 龍太郎 (2013). 日本版老年的超越質問紙改訂版の妥当性および信頼性の検討 老年社会科学, 35 (1), 49-59.
- McCullough, M. E., Emmons, R. A., & Tsang, J. A. (2002). The grateful disposition: A conceptual and empirical topography. *Journal of Personality and Psychology*, 82(1), 112-127. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.82.1.112>
- 内閣府 (2021). 令和3年版高齢社会白書 (全体版) Retrieved from https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf_index.html (2021年12月26日)
- 中川 威・増井 幸恵・呉田 陽一・高山 緑・高橋 龍太郎・榎藤 恭之 (2011). 超高齢者の語りにみる生 (Life) の意味 老年社会科学, 32 (4), 422-433.
- 小川 まどか・榎藤 恭之・増井 幸恵・岩佐 一・河合 千恵子・稲垣 宏樹・鈴木 隆雄 (2008). 地域高齢者を対象とした心理的・社会的・身体的側面からの類型化の試み 老年社会科学, 30 (1), 3-14.
- Rowe, J. W., & Kahn, R. L. (1997). Successful aging. *The Gerontologist*, 37(4), 433-440.
- Schroots, J. J. F. (1996). Theoretical developments in the psychology of aging. *The Gerontologist*, 36(6), 742-748.
- Strawbridge, W. J., Wallhagen, M. I., & Cohen, R. D. (2002). Successful aging and well-being: Self-rated compared with Rowe and Kahn. *The Gerontologist*, 42(6), 727-733.
- 富澤 公子 (2009). 奄美群島超高齢者の日常からみる「老年的超越」形成意識 老年社会科学, 30 (4), 477-488.
- Tornstam, L. (1989). Gero-transcendence: A reformulation of the disengagement theory. *Aging*, 1, 55-63.
- Tornstam, L. (1996). Caring for the elderly. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 10(3), 144-150.
- Tornstam, L. (1997). Gerotranscendence: The contemplative dimension of aging. *Journal of Aging Studies*, 11(2), 143-154.
- Tornstam, L. (2003). *Gerotranscendence from young old age to old old age*. Online Publication from The Social Gerontology Group, Uppsala.
- Tornstam, L. (2005). *Gerotranscendence: A developmental theory of positive aging*. Springer.
- 安元 佐織・榎藤 恭之・中川 威・増井 幸恵 (2017). 百寿者にとっての幸福感の構成要素 老年社会科学, 39 (3), 365-373.